

巻頭言

創刊号から約半年を経て

杉尾 一

● <https://orcid.org/0000-0002-6881-900X>

上智大学 文学部 哲学科 / JSP 編集委員

〒 102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1

2019 年 3 月 25 日原稿受付

Citation : 杉尾 一 (2019). 創刊号から約半年を経て. *Journal of Science and Philosophy*, 2(1), 1-3.

昨年、やまなみ書房から *Journal of Science and Philosophy* (JSP) の第1巻第1号(創刊号)を刊行した。幸いなことに多方面から反響があり、今回の第2巻第1号では、投稿者の中から若き俊英3名(高木翼氏(論理学)、横路佳幸氏(分析哲学)、山口真子氏(科学哲学))の論文を厳選し、掲載させて頂くこととなった。以下では、各氏の論文について簡単に紹介したい。

高木氏の論文(査読論文)は、タブロー法に関する論文である。周知の通り、タブロー法は、論理式がトートロジーであるか否かを判定する機械的な手続きを与える。これは、古典論理においては、論理式に対する完璧なテストが可能であるともいえる。一方で、古典論理以外の論理体系によっては、タブローが無限に長く伸び、妥当性を判定することができないという問題が起こりうる。このような問題が生じる論理体系として、高木氏は様相論理体系 K4 を挙げている。しかし、高木氏は、濾過法の特殊例となりうる手法を見出し、この問題の解決を試みている。これは、濾過法の可能性と有効性を示すものであり、一筋縄ではいかないものの、他の体系における同様の問題においても、何らかの規則性を見出し、さらに仮定を置くことで、妥当性判定に関する問題

を一定の範囲において解決できる期待を読者に抱かせる。

横路氏の論文(討論)は、桑原司氏による「アリストテレス『カテゴリー論』における述定とヒュポケイメノン」(2017) [1]の主張に対する問題提起からはじまる。桑原氏は、従来のアリストテレス解釈とは異なるアプローチとして、述定の言語行為の側面に注目している。このことに対して横路氏は、言語行為それ自体に対する分析を行い、桑原氏が退けようとした述定の「実在の記述の側面」(非人称的な側面)と、桑原氏が支持する「言語行為的な側面」(人称的な側面)の両者が両立しうることを指摘している。この結論を導く上で、重要な仮定は「述定が(語から世界への適合方向を持つ)主張という発語内行為であると認められる」という点にあるだろう。なぜなら、この仮定を認めれば、桑原氏のいう言語行為的な側面を強調したとしても、従来の標準的な解釈に対する論駁にはならないためだ。問題は、桑原氏がこの仮定を認めるのかということだろう。投稿者が指摘する通り、桑原氏は言語行為に言及するものの、言語行為それ自体の種類について分析していない。そういった点で、桑原氏の見落としとも言えるかも知れないが、結局のところ、投稿者が指摘する仮定を桑原氏が受け入れるか否かは、桑原氏からの応答を待たねばならないだろう。この機会に、桑原氏からの投稿も期待したい。

山口氏の論文(研究の芽)は、ハンソンが唱えた観察の理論負荷性に対する批判をクーンのパラダイム論を用いることで解決できるのではないかという論考である。観察の理論負荷性を強調し過ぎると、私たちの自然観の変化、実験・観察にもとづく経験科学の理論の変化を説明しにくくなる。このようなことから、科学者の中には、観察の理論負荷性を問題視する人たちが一定数いるのが実情だ。このような問題を背景とし、山口氏は、パラダイム論を用いて理論負荷性を乗り越えるための試論を展開している。この論文は、アイデアを中心とする論文であり、文字通り「研究の芽」と言える内容となっている。山口氏の論考が、今後どのように発展するのか期待したい。

JSPで募集する論文は、原著論文(査読論文・寄稿論文)、総説、短報、紹介、コラム、研究の芽、討論、Encyclopedia of Science and Philosophyと幅広い。学術振興の場、異分野交流の場、そして、既存の学術研究の「御作法」

に(良い意味で)縛られない場である JSP への積極的な投稿を期待したい。

参考文献

- [1] 桑原司 (2017) 「アリストテレス『カテゴリー論』における述定とヒュポケイメノン」, 上智大学哲学会(編)『哲学論集』第46号, 95-111頁, URL = <<http://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20171114017>>.

This work is licensed under a Creative Commons
“Attribution 4.0 International” license.



© 2019 Journal of Science and Philosophy 編集委員会